

《研究ノート》

伊能忠敬測量隊第八次測量における安芸・備後北部の行程

西村直城

- 一 はじめに
- 二 第八次測量の概要
- 三 文化一〇年十一月四日～二日
- 四 偽測量隊の出現
- 五 おわりに

【要約】

伊能忠敬による第八次測量復路における文化一〇年（一八一三）の安芸・備後北部測量の行程を、その地域に関する諸資料と照らし合わせる中で、偽測量隊の出現についても紹介する。

一 はじめに

伊能忠敬（一七四五～一八一八）が一七年間の年月をかけて実施し、その没後の文政六年（一八二二）に「大日本沿海輿地全図」として成果がまとめられた十次にわたる全国測量の中で、安芸・備後両国における測量は文化二年（一八〇五）の第五次測量、文化六～八年（一八〇九～

一一）の第七次測量、及び文化八～十一年（一八一三～一四）第八次測量の間にわたっている。

第七次測量復路での芸備北部における全行程については、「伊能忠敬測量隊第七次測量における安芸・備後北部の行程」^{（一）}（以下「前稿」）で紹介した。本稿では、芸備両国に関する諸資料^{（二）}と照らし合わせながら、伊能忠敬の「測量日記」^{（三）}（以下「日記」）に記された第八次測量復路での安芸・備後北部における全行程を辿る。

なお、年月日は旧暦で表記し、西暦は（ ）内に記した。地名は現代の表記に統一した。街道は『広島県史』^{（四）}で表記された名称を使用した。また、村名は文政年間に成立した『芸藩通志』に記されている呼称を使用し、日記と村名が異なる場合はこのことを明記した。

なお、日記に記された測量隊の行程については、国土地理院ホームページ（<https://kochizu.gsi.go.jp/inouzu>）掲載の伊能図で閲覧でき、御参照いただきたい。

二 第八次測量の概要

第八次測量は第七次測量で未測量であった種子島、屋久島、九州北部の測量を主目的としたもので、測量隊は文化八年十一月二五日

(二八二年一月九日)に神奈川宿を発ち、往路は富士山周辺、中山道、山陽道を経て九州に渡り、復路は山陰沿岸の一部、中国地方内陸部、京都、東海道を経て江戸に至る内陸部の街道を測量し、文化十一年五月二三日(二八一四年七月九日)に江戸に帰着している。要した日数は九百十四日で、伊能忠敬の測量隊が行った調査では最長期間である^(五)。

往路の安芸・備後国内の西国街道(山陽道)は測量を過去に終えているため、芸備国両国は六泊したのみで九州へと急いでいる。

日記によれば、伊能忠敬を除く第八次測量復路の参加者は次のとおりである。幕府天文方下役は坂部貞兵衛、永井甚左衛門、今泉又兵衛、門谷清次郎の四名で、それぞれに供侍や従者がいた。忠敬の供侍は加藤嘉平次、宮野善藏、従者は清七、内弟子は尾形慶助、箱田良助、保木敬藏、他に長持宰領の久保木佐右衛門、棹取りの久保木佐助、大山甚七の総勢十九名である。

第五次測量以降は幕府直轄事業のため、測量隊の宿泊先は幕府の役人や参勤交代で諸大名が宿泊する本陣などの施設や庄屋などの有力者の邸宅が充てられた。忠敬は測量予定地の村役人と打ち合わせをする必要から、事前に宿所に来訪するように先触れを行った。さらに宿泊地の郡役人や村役人、宿駅ならば町役人なども来訪し、忠敬の宿所は毎晩来客が絶えなかった。また、忠敬は緯度を算出するため、宿所で可能な限り天体観測を行っている。日記には来客や観測の実施・未実施が記載されているが、本稿では各宿泊地での来客及び天体観測については特に触れない。

三 文化十一年一月四日～二日

文化十一年一月二日(一八一三年一月三日)、長門国山口(山口県山口市)から測量隊は忠敬の本隊と永井、箱田、保木、佐助の別動隊に分かれた。別動隊は石見国津和野(島根県津和野町)経由で生山峠を越え、本隊はそれより南の亀尾川峠を越えて安芸国に入る行程をとった。

一月四日(一月二六日)、本隊は周防国玖珂郡秋掛村(山口県岩国市美和町秋掛)を出立し、安芸国佐伯郡浅原村(広島県廿日市浅原)に入った。前日にも一度国境を越えて測量を終えていたので、その地点から測量を開始し、同郡津田村(同市佐伯町津田)で測量を終え、阿部十吉方及び組頭嘉六方に分宿した。同村内の津田宿は、津和野藩主や大森銀山の役人が往来する宿駅であった。津田宿には本陣はなく、街道筋の大家をその用に充てられた。

一月五日(一月二七日)、津田村から佐伯郡河津原村(廿日市市河津原)、同郡友田村(同市友田)を経て同郡峠村(同市峠)まで測量を行い、津田村に戻った。五日・六日も同村に宿泊し、別動隊の到着まで逗留した。

別動隊は一月四日に周防国玖珂郡大原村(山口県岩国市錦町大原)の周防・安芸国境まで測量後、同村に宿泊した。翌五日に大原村を出立、安芸国佐伯郡中道村(廿日市市中道)の国境から測量を開始し、宿泊先の同郡栗栖村(廿日市市栗栖)の庄屋小田浅右衛門前で測量を終えた。翌六日に来栖村を出立し、津田村の本隊の宿舎に到着、本隊と合流した。

一月七日（一月二九日）、佐伯郡津田村を出立、五日に峠村に残した目印に向かいそこから測量を開始し、同郡宮内村（廿日市市宮内）で西国街道に出て、第五次の測量地点と接続した。その後は同郡上平良村（廿日市市上平良）の速谷神社までは測量を行わず、そこからは過去の調査と重複しながら一部測量を行い、廿日市町（廿日市市）の宿泊先である山田治右衛門方で測量を終えた。廿日市町は西国街道の宿駅であり、港は瀬戸内海の手駅に指定された交通の要衝で、津和野藩の御船屋敷も置かれていた。山田治右衛門は廿日市町の本陣役を務めており、測量隊はこの一軒に全員が宿泊できた。

一月八日（二月三〇日）、廿日市を出立した一行は測量を行わず広島城下に着、堺町四丁目（広島市中区堺町）の山沢屋栄蔵方に宿泊した。ここは測量隊の広島城下での定宿となっていた。堺町は広島城下の西端に位置する西国街道沿いの町で、一丁目には馬継場が、三丁目と四丁目には寛政一二年（一八〇〇）に往来する諸藩士のために用意宿が設けられていた。この晩、忠敬は訪問した町年寄の上野屋七左衛門に江戸宛ての書状を託している。

一月九日（二月一日）、広島城下を出立し、約一里半は測量を行わず、安芸郡府中村（安芸郡府中町）から測量を開始、一部第五次測量地点に接続し、第七次と重複する区間の測量を行った。西国街道から分岐して同郡温品村（広島市東区温品）から三田村往還に入り、同郡馬木村（同区馬木）、同郡福田村（同区福田）内で測量を終え、同村の西善寺の他、甚三郎及び原田十兵衛方に分宿した。

一月一〇日（二月二日）、安芸郡福田村を出立し、高宮郡小河原村（広

島市安佐北区小河原町）を経て同郡狩留家村（同区狩留家町）で三田村往還から別れ湯坂峠を越えて賀茂郡別府村（東広島市志和町別府）に入り、同郡志和堀村（同市志和町志和堀）の宿泊先である庄屋小林惣左衛門方まで測量を行った。志和堀村には堀市の地名があり、商業などで賑わっていた。忠敬は「当村は本馬継にあらず」とわざわざ注記しているが、宿駅に劣らぬ賑わいに見えたのかもしれない。

一月二日（二月三日）、賀茂郡志和堀村を出立し、豊田郡上竹仁村（東広島市福富町上竹仁）まで測量を行い、同村庄屋高橋清右衛門方に宿泊した。日記には「家作よし」とあり、全員が宿泊できた。

一月二日（二月四日）、豊田郡上竹仁村を出立し、同郡久芳村（東広島市福富町久芳）を経て賀茂郡乃美村（東広島市豊栄町乃美）の庄屋小島徳三郎方まで測量を行い、同所と勘兵衛方に宿泊した。

一月三日（二月五日）、賀茂郡乃美村を出立。豊田郡鍛冶屋村（東広島市豊栄町鍛冶屋）、同郡清武村（同市豊栄町清武）を経て備後国に入り、世羅郡吉原村（東広島市豊栄町吉原・世羅郡世羅町吉原）の庄屋長満権右衛門に宿泊した。この宿も「一軒に済」と注記しており、分宿の必要はなかった。なお忠敬は日記には、同村の近世前期の呼称である「吉原本郷」と記している。

一月四日（二月五日）、世羅郡吉原村を出立し、同郡黒川村（世羅郡世羅町黒川）、同郡上津田村（同郡世羅町上津田）を経て下津田村（同郡世羅町下津田）の三吉方に宿泊した。三吉は父親が大庄屋だったが両親が亡くなり幼年のため、小国村庄屋丈之助が仮亭主をしているとの注記がある。なお忠敬は日記には、「津田上村」、「津田市田村」と近世前

期の呼称で記している。

一月十五日（二月六日）、世羅郡下津田村を立出し、同郡徳市村（同郡世羅町徳市、三次市吉舎町徳市）から三谿郡に入り、同郡辻村（三次市吉舎町辻）、同郡丸田村（同市吉舎町丸田）、同郡清綱村（同市吉舎町清綱）を経て同郡吉舎宿（同市吉舎町吉舎）制札前まで測量を行い、ここから宿泊先の庄屋泉屋清十郎までの測量は第七次と重複した。吉舎宿については、前稿で説明した。宿舎には安那郡箱田村（福山市神辺町箱田）の庄屋細川園右衛門とその息子三人が来訪した。彼らは忠敬の門人・箱田良助の父親と弟たちである。彼らは翌日まで同行し、翌々日に分かれた。

一月十六日（二月七日）、三谿郡吉舎宿を立出し、ここから三次に向かう石州銀山街道を一部第七次と重複して測量を行った後、石州街道に分岐して同郡知和村（三次市吉舎町知和）、中津藩領甲奴郡安田村（同市吉舎町上安田、同市甲奴町拔湯）、同郡木屋村（庄原市総領町木屋）、同郡稲草村（同市総領町稲草）に入り同村「田総市」の麦屋兵三郎まで測量し、同所他に宿泊した。同村には上市、下市があり、「田総市」は両市の総称である。近隣には石見国大森代官所（太田市大森町）支配の天領があり、幕府巡見使や代官所の役人、領内巡視の広島藩主が両市に宿泊するなど、広島藩の定めた宿駅ではなかったが、宿場町として栄えていた。

一月十七日（二月八日）、甲奴郡稲草村を立出し、三上郡峰村（庄原市峰田町）、同郡春田村（同市春田町）、同郡是松村（同市是松町）、同郡新庄村（同市新庄町）を経て同郡庄原村（同市本町）に入った。ここ

から宿泊先の棧敷屋までは第七次と重複して測量した。宿泊は佐賀屋と分宿した。棧敷屋には第七次測量時にも宿泊している。

一月十八日（二月九日）、三上郡庄原村を立出し、第七次測量と重複する行程も含め、出雲国に向けて北上し、恵蘇郡市村（庄原市市町・掛田町）を経て三上郡川手村（同市川手町）と恵蘇郡川北村の分岐から比和村に向かって測量、同郡川北村伊勢町（同市川北町）の庄屋善右衛門方まで測量を行った。川北村には川北大神宮が所在し、その門前町である伊勢町は宿駅で鳥居脇には高札場が置かれていた。詳細は不明だが、忠敬は川北村の宿泊に支障があるとのことで、恵蘇郡比和町（同市比和町比和）の大庄屋三沢七郎兵衛方に宿泊した。比和町は比和村内の宿駅で、この地域の鉄生産とその輸送のための牛馬栄えていた。

一月十九日（二月一〇日）、恵蘇郡川北村伊勢町を立出し、同郡木屋原村（同市比和町木屋原）を経て同郡比和町の前日と同じ宿泊先まで測量した。

一月二十日（二月一日）、恵蘇郡比和村を立出し、同郡湯川村（庄原市高野町上湯川・下湯川。※近世後期には上湯川村と下湯川村に分かれていた）を経て「高山村新市駅」の三次へ向かう街道との分岐点である馬駅問屋場で測量を終え尾道屋平蔵方と医師渡辺元慶方に宿泊した。出雲に向かう街道は脇街道であるため、本陣はなく幕府の役人や大名の宿泊には、町屋や庄屋宅があてられた。「高山村」とは、現在の庄原市高野町に相当する地域で、中世・近世初頭は一村であったがその後分村し、高の山組、高野山十一組などと称していた。新市駅はその内の同郡新市村（庄原市高野町新市）内の宿駅で、三次からの道と庄原からの道

が合流する位置にあり、出雲国に入る手前の宿駅である。

一月二日（二月二日）、恵蘇郡新市村を出立、和南原村（庄原市高野町和南原）宿泊先まで測量。そこから出雲国との国境を越えて松江藩領仁多郡上阿井村（島根県仁多郡奥出雲町）に入り測量を終了、和南原村に戻り庄屋唯三郎方に宿泊した。国境には「御境番所」があり、同村の村民が常駐していた。

一月三日（二月三日）、恵蘇郡和南原村を出立し王貫峠を越え出雲国に入り、前日の測量終了地点から測量を開始し、同村可部屋勝太郎方に宿泊した。この夜、江戸からの御用状が村継で送られてきた。「小倉より」とあり、途中で行き違いになったと思われる。

四 偽測量隊の出現

測量隊が安芸に入る前の月の文化一〇年一〇月、「御公儀より」と称する「天文師」一行が津和野から山県郡加計村（同郡安芸太田町加計）へ入ったとの記録がある^(六)。一行は「永井甚左衛門」、「箱田良助」、「添木敬蔵」、「久保木佐助」を名乗り、測量の際の目印とする梵天を持って道の距離や高低差を測り、それを帳面に記しながら通行した。隅田屋に一泊し、測量のために村方は道筋の修理を苦勞して行い、村々の役人や割庄屋たちも同行した。

後にわかったことだが、この一行は長州藩内でも測量をしようとしたが認められなかった。その後、備前国で全員が捕らえられ、幕府に問い合わせたところ、その様な者は派遣していないとの回答があり、現地で

「御仕置」してよいと回答があったという。彼らは盗賊であつたらしく、山県郡の村役人は騙されて応対したことを悔しがった。

偽の測量隊が来訪して測量のまね事を行い、村役人たちはそうとは知らずに宿泊の便宜を図り、測量に付き従ったのである。

山県郡では、文化六年（『広島県史』では文化二年としているが、出立日から文化六年の第七次測量時と思われる。）一月三日に郡役所から、講義天文方の伊能忠敬が測量のため八月二七日に江戸を出立し諸国を巡るため領内へも来ること、道順は別紙のとおりで津和野・浜田から山県郡に来る可能性もあり、あらかじめ心得ておくことを割庄屋たちに通達している^(七)。同様の通達は、第八次測量時にも出されたと思われる。第七次測量に準じた内容であれば、行程と異なり突然測量隊が来訪する可能性もあると村役人が思ったことも十分あり得る。

注目すべき点は、一行の内「添木敬蔵」は「保木敬蔵」の誤記と思われるが、永井、箱田、佐助の名前は正確であり、山口から忠敬と別れた別動隊の一行の名前とほぼ一致している。偽測量隊が別動隊の情報を正確に把握していたことがわかる。

五 おわりに

第八次測量は、西国街道や瀬戸内海沿岸、及び島々を測量した第五次や、出雲から福山城下及び石見から広島城下へ向かう内陸部の街道を中心に測量した第七次に比較して、短期間で終わっている。これは、過去二回に未測量だった経路を測量する、補足的な調査であつたためである。

幕府の直轄事業である測量隊が、巡見使を先例としてそれに準ずる待遇を受けており、過度な待遇を要求してはいなかった忠敬の思いとは異なり、測量隊が村々に大きな負担を強いる結果となったことは、前稿で述べたとおりである。本稿で述べた偽測量隊の出現は、測量隊への待遇の裏返しと言える。日記には記述されていない、村々の測量に対する多大な労力や費用の負担によって、伊能忠敬の「偉業」は支えていたのである。今後新たな村方資料の掘り起こしによって、その実態をより明らかにしていくことが課題である。

なお、この年の一〇月には広島藩儒学者・頼杏坪（頼山陽の叔父）が恵蘇郡・三次郡の代官に任命されているが、前稿で紹介した福山藩儒学者・菅茶山のような面会の記録はない。恵蘇郡の代官である杏坪に、忠敬の行程が知らされていたことは間違いないだろう。郡内の村々を精力的に巡り領民の意見を聞いたという杏坪のこと、代官就任早々多忙を極めていたのかもしれない。

（注）

一 広島県立歴史民俗資料館『研究紀要』第9集 令和三年 所収

二 『日本歴史地名大系』35 広島県の地名』一九八二年 平凡社

『角川日本地名大辞典』34 広島県』昭和六十二年 角川書店

頼杏坪他編『芸藩通志』（復刻）昭和五十六年 国書刊行会

その他、後掲書を参考文献とした。

三 佐久間達夫校訂『伊能忠敬 測量日記』第五卷九州二次の二 一九九八年

四 広島県『広島県史』近世2 昭和五十九年 図二二二「近世後期における芸備地域の主要道路網」

五 以下、伊能忠敬の測量全般については次の文献を参考にした。

渡辺修一郎『伊能忠敬の歩いた日本』一九九九年 ちくま新書

伊能忠敬研究会『伊能忠敬日本列島を測る―忠敬没後二〇〇年―』前編

平成三十年（二〇一八）

総領町『総領町誌』平成六年

高野町『高野町史』平成一七年（二〇〇五）

六 「香草上野屋文書「年代記」」（加計町『加計町史』資料編Ⅰ 平成十一年 所収）

七 「隅屋文庫「組合村々万覚書帳」」（広島県『広島県史』近世資料編Ⅳ 昭和

五九年 所収）

（にしむら なおき 当館学芸課長）

